MCN経営漫談コラム 「続・三々な経営」シリーズ Z-39

三字熟語⑨軍官民

企業経営漫談士 岡野実空

「軍官民」とは、太平洋戦争以前の国民の分類、かつその総称。江戸時代の「士農工商」同様、本来は国民の「役割分担」を意味するものでありながら、いずれも「序列」を意識させます。ここでは「軍官民」から生まれる「イノベーション」と、経営的に注視すべきポイントを考えます。

その1：本義

「軍官民共生共死」とは、太平洋戦争の沖縄戦における住民指導の方針。そこでは「役割分担」の「軍官民」が、軍人の「戦陣訓」と一体化して悪用され、多くの一般人を戦闘に巻き込んで、甚大な犠牲を強いることになりました。

またその序列は「官民」や「政官財」など形を変え、戦後もしぶとく生き残りました。そして平和な時代の一体化は、癒着による「規制」を生み続け、社会の進歩の大きな阻害要因となっています。

その2：「軍官民」の役割分担

さて今回考えるのは、もちろん平和な社会に貢献する「イノベーション」と「軍官民」の関り。実際、私たちの生活や所属組織を支えているモノやコトを見渡すと、その多くが「軍」由来です。

まず身近な「食」でいえば、乾燥食品、缶詰・瓶詰に始まり、いま激増中の冷凍食品に至るまで、その多くは軍事用に開発されたモノ。近年は宇宙用が加わりましたが、そこはいま新たな戦場です。また「衣」などの素材に関しても同様で、かつてパラシュート事故の主因だった「絹」を駆逐したのは、合成繊維のナイロンでした。さらに「住」の代表は、兵舎から転じたプレハブ住宅です。

また馬や鳥などの運動能力への憧れからスタートした自動車や飛行機の開発も、初期の大きな受け皿は軍事用。国防など国家の大事に対しては、コストを度外視した研究開発投資が可能で、それが次なる民需に応える産業育成につながり、社会全体を豊かにする可能性を秘めているからです。

さて上記の循環こそ、「軍官民」や「政官財」という「序列」が生まれる主因ですが、私たちが注目すべきなのはその原資。それはいつの時代も、税や公債などをつうじて、「民」から提供された資金に他なりません。「主権」を持つ国民がその事実に目覚めないよう、「官」が強調する標語こそ、「軍官民」の流れを汲む「官民一体」なのです。

☞ 「三々な経営」
3-11～13 「イノベーション」(分類～プロセス)
3-14～17 「イノベーション」の壁①～④
☞ 続「三々な経営」
Z-38 三字熟語⑧断捨離

その3：「経営」への適用

以上の現実を踏まえ、「民」の覚醒を担うのは、各企業の経営者とミドル。そこでの「軍官民」とは、イノベーションに関する「目のつけどころ」です。

まず最先端の研究開発が行われている「軍」に関しては、そこで密かに試行錯誤されているモノやシステム。またそれと同時に、すでに汎用化、あるいは陳腐化した技術や仕組みに注目。それは間もなく「民」への転用、すなわち商業化によって、「官」が投資の回収を始めるからです。

その循環の本家は、近代の欧米。そしてその技術や仕組みを学び、それらの改善の達人となって巨富を築いた戦後の日本。その後、金融という搦め手で莫大なその使用料を本家筋から徴収され、懸命に耐え凌いでいるうちに、自活に転じる貴重な時期、平成が過ぎてしまいました。しかも古臭い「規制」や「利権」との戦いに、いまだ多くの労力と時間を浪費しているのが「民」の実情。残念ながら私たちはまず、その「撤廃」に向けた活動から始めなければなりません。今回の「軍官民」の前に、急遽「断捨離」を取り上げた理由もそこにあります。

さてそんな中、突如降って湧いたようなコロナ禍。それは上記の現実を白日の下に曝す一方、「自粛の要請」という手で、「政官」は自らの役割と責任を巧みに回避しています。そのためいま、「民」でも規制強化派が復活基調に。かつてその「撤廃」を「緩和」に言い換えた「官」の姑息さは、永遠に不滅です!?要警戒!!

2021年9月20日 実空

©NPO マネジメント共育ネットワーク